

学部における心理学専門教育の 導入に関する一研究（5）

～中学生、高校生、大学生が心理学に対して抱くイメージの検討～

芳 賀 康 朗

〈要旨〉本研究では、大学生が心理学に対して抱いているイメージの構造を芳賀・川島・望木（2017）の分析結果をもとにして再検討することを目的とした。また中学生と高校生に対しても心理学に対するイメージを調べる質問紙調査を実施し、中学生から大学生に至る過程で心理学に対する期待感や認識が変化する過程についても分析した。大学生427名を対象として質問紙調査を行った結果、心理学に対するイメージは役立ち因子と実証科学因子の2因子が導出された。役立ち因子は心理学の有用性と関連した11項目から構成されており、実証科学因子には科学的手法を駆使して心的現象にアプローチする心理学の学問的特徴と関連した6項目から構成されていた。中学生、高校生、大学生それぞれのイメージを比較した結果、心理学の実証科学的特徴に対する理解は段階的に進むものの、心理学の有用性に対する期待は中学生から高校生にかけて上昇した後、大学での学習経験を経て有意に低下した。大学で心理学を学習する前に、高校での学習内容と心理学との関連を把握し心理学の学問的特徴を理解しておくことが、心理学に対する失望や落胆を防ぐことにつながると考えられる。

〈キーワード〉心理学のイメージ、心理学の有用性、実証科学、心理学教育

1. はじめに

心という身近なテーマを扱う心理学に対して興味や関心をもつ大学生は多いが、学問としての心理学の目的や研究方法、最新の研究所見が正しく認識されているとはいえない。また、数学や生物学などの学問とは異なり、心理学は高等学校までの授業科目に設定されていないため、体系立った学習を受ける機会はほとんどない。さらに、現代社会はテレビやインターネット、書籍などをとおして、人間関係、自己啓発、性格類型論、コミュニケーション、心霊体験などの通俗的テーマに関する誤った情報が垂れ流される状態にあり、それらが学問としての心理学が扱うテーマであると勘違いして大学に入学する学生もみられる。

筆者の勤務するような地方小規模大学の場合、地元大学への進学志向が強い、大学で学ぶ学問分野へのこだわりが弱い、入学時に心理専門職をめざす学生が少ないなどの理由から、心理学の実像を知らずに入学してくる学生は少なくない。また、大学受験前に進学説明会やオープンキャンパスなどの機会を通じて心理学の学習内容、関連資格、キャリアパスに関する情報を積極的に収集してこなかった学生も散見される。

大学で最初の心理学の講義を受講し終えた大学1年生を対象として講義の印象を尋ねた芳賀・川島（2016）の研究では、心理学が生物学や脳科学などの自然科学と密接な関係をもった学問であることに驚く声が数多く寄せられた。また、「自分がイメージしていた心理学とは違った内容だった」、「もっと人の心を読む方法について触れてほしかった」、「数学や理科の内容ばかりだった」との失望や落胆の声も見受けられた。これらの結果は、心に関する話題が豊富にあるため、専門的かつ体系的な学びを始める前に心理学に対する偏ったイメージや過度な期待が形成されていることを示唆している。

大学生が心理学に対して抱いているイメージを調べた研究はこれまでに数多く行われてきた。今野（2000）は教育・心理・心身障害学を学ぶ大学1年生を対象に調査を実施し、彼らが心理学に対して「人間的な」、「科学的な」、「医学的」、「社会に役立つ」の4種類のイメージをもっていることを明らかにし

た。心理専攻学部生と非心理専攻学部生を対象とした岩崎・大橋・皆川（2012）の研究では、心理学のイメージは「科学的理系的」因子、「楽しさ」因子、「アプローチ方法」因子の3因子構造であることが示されている。一般市民を対象としてオンライン調査を行った大橋・岩崎・皆川（2012）の研究では、心理学は難しく、脳研究との関わりが深く、数学的要素も強いが、実践的で楽しいというイメージが持たれていることが示された。さらに保健医療学部と看護学部の1年生を対象とした時田・金野・野村・奈良（2018）の研究では、心理学のイメージとして、「非科学的」、「文系的」、「親近感」の3因子が抽出されており、実像とは大きく乖離したイメージが大学入学時点で形成されていることが指摘された。

芳賀・川島（2017）と芳賀・川島・望木（2017）は、心理学初学者と心理学の学習経験がある大学生を対象として心理学に対するイメージ構造を分析した。調査結果から、心理学に対するイメージは役立ち因子、実証科学因子、似非科学因子の3つから構成されていることが確認された。役立ち因子は自己理解、他者理解、他者援助などに対する心理学の有用性に関連する項目から構成されていた。実証科学因子は実験や統計処理といった心理学の実証科学的側面に関連する項目で構成されていた。また似非科学因子は、心理学に対する通俗的かつ非科学的な印象と関連する項目で構成されていた。さらにこの研究では、学習経験によって心理学の実証科学的特徴の理解は促進されるが、心理学の有用性に対する疑念や失望が高まることが示された。芳賀（2018, 2019）は大学入学直後の心理学初学者を対象として、占いや心霊現象のような不思議現象（paranormal phenomenon）に対する信奉傾向、批判的思考態度、心理学に対するイメージの3者間の相関関係を分析した。その結果、心理学に対するイメージの下位因子である実証科学因子と不思議現象信奉傾向および批判的思考態度との間に有意な相関関係は認められなかった。この結果は、心理学学習前の段階では、心理学は実証科学であり批判的思考態度が必要とされることが認識されていない可能性を示唆している。楠見（2018）が述べているように、大学で学ぶアカデミックな心理学と、テレビなどのメディアで紹介される通俗心理学（popular psychology）の違いを正しく認識しない状態で大学に入学し

てくる学生が数多くいることがこれらの調査結果から確認されたといえる。

しかしながら、心理学に対するイメージの3因子構造を確認した芳賀他（2017）の調査にはいくつかの問題点があり、その構造を再検討する必要がある。第1の問題点は、十分な数の調査協力者からデータを取得することができないまま因子分析を行った点である（分析対象データ数は177名（初学者102名、学習経験者75名））。第2の問題点は、因子分析で抽出された3つの因子のうち、第2因子である実証科学因子と第3因子である似非科学因子において十分に高い内的整合性が示されなかった点である（実証科学因子では $\alpha = .67$ 、似非科学因子では $\alpha = .63$ ）。以上の問題点を考慮し、本研究では心理学初学者と心理学学習経験者が心理学に対して抱いているイメージの構造を再検討することを第1の目的とした。自由記述式の質問を削除して調査協力者への負担を軽減し、芳賀他（2017）における因子分析で抽出された3因子に含まれた21項目に対して5段階評価で回答を求めた。

本研究の第2の目的は、高校生と中学生にも質問紙調査を行い、その結果を大学生のデータと比較することである。日本の高等学校教育では、さまざまな教科・科目の中に心理学に関わる教育内容が分散されて設定されており、体系立った心理学教育を享受する機会はほとんどない（表1）。教科「公民」の科目「倫理」では心理学にかかわる教育内容が数多く扱われているが、その内容が教科「理科」の科目「生物基礎」や「生物」の教育内容や教科「保健体育」の教科「保健」の教育内容と関連づけられ、包括的に教育される機会はほとんど期待できない。高校生が抱えている心理学へのイメージや期待感を調べた林・村上・三沢（2018）の研究では、心理学に興味関心を抱く生徒の期待感と心理学の実態にはミスマッチが存在し、自己理解や他者理解に対する期待は大学生よりも高く、社会貢献や論理的思考力に対する期待は低いことが示されている。泊（2016）の研究では、高校生は有名芸能人や自称メンタリストが登場するテレビ番組から心理学に関する情報を得る機会が最も多く、心理学への興味・関心は高いもののそのニーズを通俗心理学的な情報で満たしていることが指摘されている。

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（５）（芳賀）

表 1 高校で学習する主な心理学関連のテーマ
（高等学校学習指導要領（平成30年告示）から抜粋）

科目	学習内容 項目	キーワード
数学Ⅰ	データの分析	分散 標準偏差 散布図及び相関係数 最頻値 平均値 中央値 四分位範囲 相関と因果 仮説検証 仮説探索 棒グラフ ヒストグラム 折れ線グラフ 箱ひげ図 散布図 量的データ 質的データ クロス集計表
数学Ⅱ	指数関数・対数関数	累乗根 常用対数
数学 A	場合の数と確率	順列・組み合わせ 期待値 条件付き確率
数学 B	統計的な推測	標本調査 確率分布 二項分布 正規分布 区間推定 信頼区間 有意水準
生物基礎	ヒトの体の調節	中枢神経系 末梢神経系 自律神経系 内分泌系 ホルモン
生物	生物の進化	自然選択 系統樹 人類の系統と進化 二足歩行
	生物の環境応答	動物の反応と行動 刺激の受容と反応 神経細胞の活動電位 盲斑 色覚 残像 錐体細胞 性フェロモン 定位行動 アメフラシのえら引つ込め反射 慣れ
倫理	現代に生きる自己の 課題と人間としての 在り方生き方	青年期の課題 人格、感情、認知、発達についての心理学の考え方
保健体育	現代社会と健康	欲求と適応機制 心身の相関とストレス ストレスへの対処 心の健康と自己実現 思春期と健康
家庭基礎	人の一生と家族・ 家庭及び福祉	青年期の自立と家族・家庭 子供の生活と保育 高齢期の生活と福祉 共生社会と福祉

これらの先行研究から、高校生の心理学に対する興味や期待感が高いものの、不正確な情報によって誤ったイメージが形成されていることが問題点として指摘できる。心理学に対するイメージが大学入学前から大学で専門教育を受けるまでの間にどのように変化するかについて理解することで、大学入学後の心理学に対する失望と落胆、学習意欲の低下を防ぐヒントを得ることが期待される。そこで本研究では、2017年から2019年にかけて筆者が行った模擬授業や

出前授業などの機会に実施した質問紙調査の結果を分析し、学校での学習経験、進路選択、受験経験、人間関係の変化などの要因が心理学に対するイメージの変化にどのような影響を与えるのかについても検討する。

2. 研究1

目的

芳賀他（2017）で示された大学生が心理学に対して抱いているイメージの3因子構造（役立ち因子、実証科学因子、似非科学因子）を再検討することを目的として調査分析を行う。前回の調査では30項目の心理学に関連する記述に対して評定を求め、21項目からなる3因子構造を確認した。本研究では、その21項目のみについて評定を求め、再度因子分析によりイメージ構造を検討することにする。

方法

- 1) 調査協力者および調査方法：東海地方の4年制大学で心理学の専門科目（「心理学概論Ⅰ」および「学習心理学」）を受講した大学生427名に調査協力を依頼した。そのうち245名（男性139名、女性106名）は心理学の専門科目を入学後にはじめて受講した1年生（以下「大学生初学者」とする）であり、残りの182名（男性71名、女性111名）は調査実施時点で既に専門科目の受講経験が1年以上ある学生（以下「大学生学習者」とする）であった。大学生学習者の内訳は、2年生57名、3年生104名、4年生21名であった。調査時期は2018年および2019年の4月で、初回の授業で調査を実施した。調査協力者には調査目的を説明した上で質問紙を配布し、約10分間回答時間をとった。回答前に、すべての質問に回答する義務はないこと、回答結果の匿名性は守られること、調査目的以外に回答結果が使用されることはないことを説明した。回答済みの質問紙はその場ですべて回収された。
- 2) 質問紙：調査協力者の属性（性、年齢、学年）を記入するフェイスシート

と、心理学に対するイメージを尋ねる質問21項目が記された質問紙のA 4版2枚から構成された。21項目の質問は、芳賀他（2017）の研究で示された心理学のイメージを構成する3因子に含まれていた項目であり、各項目に対する評定は、「とてもそう思う（5点）」、「すこしそう思う（4点）」、「どちらともいえない（3点）」、「あまりそう思わない（2点）」、「まったくそう思わない（1点）」のいずれかを選択する5件法で行われた。データ解析には、清水（2016）のフリー統計分析ソフトHADを使用した。

結果

回答に不備があった5名（大学生初学者4名、大学生学習者1名）を除いた422名のデータを分析対象とした。調査協力者が心理学について抱いているイメージの構造を明らかにするために、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。1回目の因子分析の結果から固有値1以上の因子は4個抽出され、その減衰パターンは5.22、2.98、1.52、1.14…となっており、スクリープロットの形状および因子の解釈可能性を考慮して2因子構造が適当であるとの結論に至った。しかし2項目については因子負荷量が.35未満であったため（「理系の学問である」と「レポートや宿題がたくさんある」）、これらの項目を除外し再度因子分析を行った。その結果、2因子のどちらにも十分な因子負荷量を示さない項目および両方の因子に.30以上の負荷量を示した項目が2つあった（「他者の行動をあやつることに役立つ」と「アンケート調査を行う」）。そこで、それらの2項目を除外して、残った17項目について再度最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。最終的な因子パターンと因子間相関を表2に示した。2因子の累積寄与率は44.04%であり、17項目すべての因子負荷量が.40以上であった。因子間相関は $r = -.09$ であった。

表２ 心理学に対するイメージについての因子分析
(Promax回転後の因子パターン)

項 目	因子 I	因子 II
自分の悩みを解決することに役立つ	<u>.787</u>	-.053
他者の心を理解することに役立つ	<u>.736</u>	.025
自分が変わることに役立つ	<u>.726</u>	-.003
人付き合いに役立つ	<u>.723</u>	-.124
他者の悩みを解決することに役立つ	<u>.677</u>	-.007
自分の心を理解することに役立つ	<u>.646</u>	.081
癒しを与えてくれる	<u>.547</u>	-.101
たのしそう・おもしろそう	<u>.509</u>	.209
将来の仕事に役立つ	<u>.495</u>	.120
優しそう	<u>.488</u>	-.049
カウンセリングを行う	<u>.443</u>	.113
非科学的である	.028	<u>-.634</u>
科学的である	.054	<u>.612</u>
占いやオカルトと関係がある	.251	<u>-.514</u>
うさんくさそう・あやしそう	-.141	<u>-.495</u>
数学や統計学が必要とされる	-.001	<u>.491</u>
実験を行う	.156	<u>.429</u>
因子間相関	I	II
	I	-.09

第1因子は、自分自身や他者の心の理解や悩み解決に役立つ、人付き合いや将来の仕事に役立つ、癒やしや優しさを与えてくれる、といった実生活における有用性と関係する項目で構成されていた。この因子を構成する11項目はすべて芳賀他（2017）の研究における役立つ因子と同じものであったため、因子の名称は役立つ因子のままとした。第2因子は、実験を行い数学や統計学を駆使するといった心理学の実証科学的特徴、および非科学的かつ通俗的であるといった印象と関連した合計6項目から構成されていた。これらの6項目は芳賀他（2017）の研究で示された実証科学因子と似非科学因子のいずれかに含まれていた項目であった。芳賀他（2017）の研究では似非科学因子に含まれていた3項目（「非科学的である」、「占いやオカルトと関係がある」、「うさんくさそう・あやしそう」）の因子負荷量は本研究ではすべてマイナスの値を示しており、実証科学因子に含まれていた残りの3項目（「科学的である」、「数学や統

計学が必要とされる」、「実験を行う」）とは反対に、負の因子相関をもっていると考えられる。したがってこの第2因子の名称も実証科学因子のままとした。

内的整合性を表す α 係数は、役立ち因子で .87、実証科学因子で .67 であった。実証科学因子の α 係数は十分に高い値とはいえなかった。しかし、身近だが捉えどころのない心的現象を科学的手法によって解明するという心理学の特徴が現れている因子でもあるので、以降の分析の対象とした。

3. 研究2

目的

研究1では、大学生の心理学に対するイメージが役立ち因子と実証科学因子の2因子17項目から構成されていることが確認された。研究2では、筆者がこれまでにオープンキャンパスでの模擬授業や高等学校に出向いて行った出張授業などの機会に中学生および高校生から収集したデータを加えて再分析を行い、学校での学習経験や進路選択経験、および発達段階の違いが心理学に対して抱くイメージに及ぼす影響について検討する。

方法

- 1) 調査協力者および調査方法：大学生初学者（ $n=241$ ）と大学生学習者（ $n=181$ ）のデータは、研究1で分析対象とした422名のデータを利用した。さらに、オープンキャンパスでの模擬授業、高等学校に出向いて行った出前授業や進学説明会、大学見学に訪れた中学生に対する模擬授業などの機会に2017年度から2019年度にかけて筆者が収集したデータも分析対象とした。高校生から収集したデータ134名分の内訳は、男子62名、女子72名であり、1年生は25名、2年生は44名、3年生は65名であった。中学生から収集したデータ64名分の内訳は、男子29名、女子35名であり、全員が3年生であった。高校生と中学生に実施した調査の内容と手続きは研究1と同様で

あり、データ収集時に付添教員がいた場合には調査の目的と内容を説明した上で調査協力の承認を得た。さらに、調査協力者に対しては、調査用紙配布後の説明で、すべての質問に回答する義務はないこと、回答結果の匿名性は守られること、調査目的以外に回答結果が使用されることはないことを説明した。回答済みの質問紙はその場ですべて回収された。

2) 質問紙：研究1で使用したのと同じ質問紙を使用した。データ解析には、清水（2016）のフリー統計分析ソフトHADを使用した。

結果

調査結果の分析は、回答に不備のあった中学生7名（男子5名、女子2名）、高校生1名（男子1名）のデータを除いて行った。また実証科学因子に含まれる「非科学的である」、「占いやオカルトと関係がある」、「うさんくさそう・あやしそう」の3項目の因子負荷量はすべてマイナスの値を示し負の因子相関もっていると考えられるため、評点を逆転させて実証科学的印象が高いほど評点も高くなるように変換して処理した。

1) 因子ごとの平均評点の比較

役立ち因子11項目の合計評点および実証科学因子6項目の合計評点について、調査協力者種別（中学生、高校生、大学生初学者、大学生学習者）ごとに平均評点を求めた。役立ち因子の平均評点は中学生で40.93点（SD=6.96）、高校生で45.36点（SD=5.75）、大学生初学者で43.93点（SD=6.21）、大学生学習者で40.86点（SD=6.50）であった。これらの平均評点について一元配置の分散分析による比較を行った結果、主効果が有意となった（ $F(3,609) = 16.89, p < .001$ ）。Holm法を用いて多重比較を行ったところ、中学生と高校生の間で平均評点が有意に上昇し（ $t(609) = 4.44, p < .01$ ）、大学生初学者と大学生学習者の間で有意に低下した（ $t(609) = 4.92, p < .01$ ）ことが確認された。

実証科学因子の平均評点は中学生で18.88点（SD=3.35）、高校生で20.41点（SD=2.90）、大学生初学者で20.42点（SD=3.58）、大学生学習者で24.14点（SD=3.38）であった。これらの平均評点について一元配置の分散分析による比較を行った結果、主効果が有意であった（ $F(3,609) = 61.39, p < .001$ ）。

Holm法を用いて多重比較を行った結果、中学生と高校生間で平均評点が有意に上昇し（ $t(609) = 2.86, p < .01$ ）、大学生初学者と大学生学習者間でも有意に上昇した（ $t(609) = 11.27, p < .01$ ）ことが確認された。

2) 質問項目ごとの平均評点の比較（表3）

因子ごとの平均評点の比較分析で得られた結果を詳細に分析するために、各因子を構成する17項目の質問ごとに平均評点を求め、一元配置の分散分析によって調査協力者種別間で比較を行った。役立ち因子を構成する11項目の平均評点について比較した結果、「自分が変わること役立つ」、「癒しを与えてくれる」、「優しそう」の3項目以外の8項目で、中学生と高校生間で有意な上昇傾向が認められた（「自分の悩みを解決することに役立つ」、「他者の心を理解することに役立つ」、「人付き合いに役立つ」の3項目では5%水準で有意、それ以外の5項目では0.1%水準で有意）。また「たのしそう・おもしろそう」と「カウンセリングを行う」の2項目以外の9項目では、大学生初学者と大学生学習者間で有意な下降傾向が認められた（「自分の悩みを解決することに役立つ」、「自分が変わること役立つ」の2項目では5%水準で有意、それ以外の7項目では0.1%水準で有意）。さらに高校生から大学生初学者間で有意な下降傾向が認められたのは、「他者の心を理解することに役立つ」、「人付き合いに役立つ」、「優しそう」、「カウンセリングを行う」の4項目であった（「カウンセリングを行う」のみ1%水準で有意、それ以外の3項目は5%水準で有意）。

実証科学因子を構成する6項目の平均評点について同様の分析を行った結果、「占いやオカルトと関係がある」、「うさんくさそう・あやしそう」の2項目については、中学生と高校生間で有意な上昇傾向が認められた（いずれも1%水準）。なおこの2項目は負の因子相関をもっている項目であり、平均評点が増えることは、心理学と占いやオカルトとの関係を認める傾向、および心理学にうさんくささやあやしさを感じる傾向が弱まることを意味している。また大学生初学者と大学生学習者間では6項目すべてで有意な上昇傾向が認められた（すべて0.1%水準）。

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（５）（芳賀）

表３ 項目別の平均評点（カッコ内は S D）

因子	項目	中学生	高校生	大学生 初学者	大学生 学習者
		n=57	n=133	n=241	n=181
役立ち	自分の悩みを解決することに役立つ	3.65(1.10)	4.08(0.88)	3.94(0.96)	3.66(1.00)
	他者の心を理解することに役立つ	4.21(0.95)	4.57(0.69)	4.36(0.73)	4.08(0.86)
	自分が変わること役立つ	3.75(0.78)	4.02(0.88)	3.92(0.94)	3.67(1.01)
	人付き合いに役立つ	4.05(0.96)	4.42(0.71)	4.17(0.78)	3.86(0.82)
	他者の悩みを解決することに役立つ	3.95(0.87)	4.38(0.74)	4.32(0.78)	4.01(0.85)
	自分の心を理解することに役立つ	3.88(1.04)	4.30(0.80)	4.42(0.74)	4.15(0.84)
	癒しを与えてくれる	2.86(0.94)	3.21(1.03)	3.25(1.01)	2.73(0.95)
	たのしそう・おもしろそう	3.75(1.11)	4.28(0.82)	4.10(0.88)	4.14(0.87)
	将来の仕事に役立つ	3.37(0.95)	4.01(0.98)	3.94(0.92)	3.60(0.98)
	優しそう	3.28(0.93)	3.31(0.97)	3.21(1.03)	2.85(0.88)
	カウンセリングを行う	4.18(0.84)	4.59(0.69)	4.31(0.82)	4.11(0.95)
実証科学	非科学的である*	3.05(0.87)	3.26(1.00)	3.28(1.02)	3.79(0.99)
	科学的である	3.53(1.14)	3.35(1.00)	3.39(0.94)	3.75(0.89)
	占いやオカルトと関係がある*	2.54(1.09)	3.12(1.20)	2.95(1.16)	3.81(1.15)
	うさんくさそう・あやしそう*	3.05(1.05)	3.68(1.00)	3.48(1.02)	3.92(0.97)
	数学や統計学が必要とされる	3.28(1.17)	3.39(1.05)	3.57(1.12)	4.41(0.83)
	実験を行う	3.42(1.15)	3.60(1.16)	3.75(1.04)	4.47(0.69)

*がついた3項目は負の因子相関を示しており、評点を逆転させて計算した。

4. 全体的考察

芳賀他（2017）の研究で示された大学生が抱く心理学に対するイメージの構造を再検討した研究1では、役立ち因子と実証科学因子の2つが導出された。芳賀他(2017)では、役立ち因子（11項目）、実証科学因子（6項目）、似非科学因子（4項目）の3因子が導出されたが、本研究では実証科学因子と似非科学因子に含まれていた項目中の6項目が合わさって一因子が形成された。また、似非科学因子に含まれていた3項目の因子負荷量は本研究の実証科学因子ではいずれも負の値を示した。したがって、実証科学因子が導出された結果は、心理学は占いやオカルトといった通俗のテーマや非科学的現象を扱う胡散臭い学問ではなく、実験やデータ解析といった方法を駆使して心的現象にアプローチする実証科学として認識されていることを意味している。

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（5）（芳賀）

ただしこのイメージは大学入学前に形成されているとはいえない。青年期を通じて段階的に実証科学としての心理学のイメージが形成されることが研究2の結果から示唆されるであろう。実証科学因子の平均評点は、中学生と高校生の間および大学生初学者と大学生学習者の間の2段階で有意に上昇している。さらに、実証科学因子を構成する6項目の平均評点の変化からは、占いやオカルトのような非科学的現象と心理学との繋がりが段階的に弱まり、心理学に対する胡散臭さや怪しさといった印象も段階的に解消されていくことが読み取れる。

アイデンティティ拡散や対人関係のトラブルを経験する青年期の人間には、占いや心霊現象のような話題は心理学に対して興味を抱ききっかけとなる可能性は高い。高校生の心理学に対するイメージ構造を調べた小浜・高田（2017）の研究では、占い、性格診断、夢分析、恋愛テクニック、メンタリズム、セールステクニックといった項目が構造化していることが報告されている。林・村上・三沢（2018）は、高校生の段階では心理学が自己理解や他者理解に役立つと認識されているものの、心理学に対するイメージはまだ曖昧である可能性を指摘している。

心理学の有用性や実用性に対して期待がもたれていることは、研究1において芳賀他（2017）の研究と同じ11項目から役立ち因子が抽出されたことからもうかがえる。心理学に対するこうした期待感は、心理学を学ぶ大学生に限らず、高校生においてもみられることが先行研究で確認されている（小浜・高田, 2017）。しかし、そうした期待感が大学での学習経験によって満たされず、失望や落胆に変わっていく可能性も考えられる。

本研究の研究2では、中学生から高校生にかけて一度上昇した役立ち因子の平均評点が大学生初学者と大学生学習者の間で有意に低下していることが示された。役立ち因子を構成する11項目についての分析結果からも、自己理解、他者理解、コミュニケーションに関係する9項目での低下傾向が顕著であることが示された。この結果は、大学での学習経験によって心理学に対する期待が裏切られていることを示唆しているのではないだろうか。「自分がイメージしていた心理学とは違った内容だった」、「相手の心を読み取れるようになるかと

思った」、「数学や理科の内容ばかりだった」といった感想が入門的講義を受講した後に学生から寄せられたことを報告している芳賀・川島（2016）の研究もこの可能性を裏付けるものといえる。さらに、「心理学を学んだら何か役に立つ知識や技能が身につく」といった期待感が裏切られるだけでなく、心理学に対する関心そのものが低下する可能性も考えられる。岩崎・大橋・皆川（2012）は、心理学専攻の学生は入学時には心理学の各領域に対して高い関心を抱いているが、受講経験を通じて臨床心理学、発達心理学、認知心理学などの分野に対する関心が低下していくことを確認している。大学で専攻する学問に対する関心の低下は学習意欲を削ぐだけでなく、休退学を含む進路変更の遠因となることも予想される。

大学生を対象とした芳賀（2018, 2019）の研究では、パワースポット、UFO、靈感などの根拠の曖昧な不思議現象に対する信奉傾向の強さと心理学に対するイメージを構成する役立ち因子の評点との間に有意な正の相関があることが確認されている。この結果は、心理学の学問としての実像が正しく理解されないまま、誤った期待が向けられている可能性を意味しているのではないだろうか。心理学が研究対象とするテーマが根拠不十分な読心術や「メンタリズム」のようなエンターテインメントと混同されているため、それらの内容が授業で取り上げられなかったことに不満をもったり、「相手の心を読めるようになる」といったそもそも達成不可能な期待が裏切られたと感じるのかもしれない。さらに、自らが抱えた対人関係やアイデンティティに関する問題の解決に役立つ知識やテクニックが与えられなかったことにも不満を感じるのかもしれない。いずれにせよ、大学で心理学を学ぶ前に、学問としての心理学の実像を正しく認識してもらうことが、大学における心理学教育の出発点として重要であるといえるだろう。

以上見てきたように、大学で心理学を学ぶ前の段階で、心理学の有用性に対する期待は高まっているが、実証科学としての認識が不足しており、その乖離状態が受講後の失望や不満の原因になっている可能性が示された。誰もが経験する「あるある」体験、マスメディアによって形成された誤った常識、悩みごとと解決に賭ける大きな期待を前提として、日常経験からは理解困難な心身相関

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（５）（芳賀）

や精神疾患に関するテーマも取り上げることが「大学で学ぶ（大学でおしえる）心理学」の特徴である。「経験的な実践知に科学的な心理学の知識をどのように融合するか」（楠見, 2018）といった問題に取り組むことが、心理学ブームが去り国家資格（公認心理師）がスタートした現在の大学における心理学教育の課題であるといえるだろう。

引用文献

- 芳賀康朗（2018）. 不思議現象信奉傾向と心理学に対するイメージとの関連 第67回東海心理学会大会発表論文集, 20.
- 芳賀康朗（2019）. 学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（４）～不思議現象信奉傾向と心理学に対するイメージとの関連～ 皇學館大学紀要, 57, 17-30.
- 芳賀康朗・川島一晃（2016）. 学部における心理学専門教育の導入に関する一研究 皇學館大学紀要, 54, 33-54.
- 芳賀康朗・川島一晃（2017）. 学部における心理学専門教育の導入に関する一研究 第66回東海心理学会大会発表論文集, 25.
- 芳賀康朗・川島一晃・望木郁代（2017）. 学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（２）～学習経験が心理学に対するイメージの変容に及ぼす影響～ 皇學館大学紀要, 55, 95-115.
- 林郷子・村上史朗・三沢良（2018）. 高校生が抱く心理学への期待感 心理学科に在籍する大学生との比較を通して 日本心理学会第82回大会発表論文集
- 岩崎智史・大橋恵・皆川順（2012）. 心理学に対するイメージ（１）心理専攻学部生と非心理専攻学部生を対象とした横断的研究 東京未来大学研究紀要, 5, 1-9.
- 小浜駿・高田治樹（2017）. 心理学に対して抱かれているイメージと期待(1) 高校生および大学生を対象とした探索的検討 日本心理学会第81回大会発表論文集.

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（5）（芳賀）

- 小浜駿・高田治樹（2018）. 心理学に対して抱かれているイメージと期待（3）
イメージ・期待・評価に関する測定指標の作成 日本心理学会第82回大会発
表論文集, 911.
- 今野裕之（2000）. 心理学とは 松井豊（編）高校生のための心理学（pp.13-31）
大日本図書
- 楠見孝（2018）. 誰もがみんな心理学者？—日常生活で役立てるために— 日
本心理学会（監修）・楠見孝（編）心理学って何だろうか？—四千人の調
査から見える期待と現実（pp.1-29）誠信書房
- 文部科学省（2018）. 高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説
- 大橋恵・岩崎智史・皆川順（2012）. 心理学に対するイメージ（2）一般市民対
象のオンライン調査より 東京未来大学研究紀要, 5, 11-20.
- 清水裕士（2016）. フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教
育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 高田治樹・小浜駿（2018）. 心理学へのイメージと期待の探索的検討：チェック
リストの試作と相互関連の検討 立教大学心理学研究 60, 61-75.
- 時田みどり・金野達也・野村健太・奈良雅之（2018）. 保健医療学部・看護学部
1年生における心理学リテラシーの特性 目白大学健康科学研究, 11, 95-104.
- 泊真児（2016）. 高校生は心理学の情報をどこから入手しているか？—心理学
の情報源と心理学イメージの関連— 日本教育心理学会第58回大会発表論文
集, 441.

学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（5）（芳賀）

A Study on the introduction of psychology curriculum into undergraduate education (5).

Developmental changes in the image of psychology from junior high school students to university students.

Yasuaki Haga

Abstract

This study aimed to re-examine the structure of images that university students have for psychology, based on the results of the previous studies (e.g., Haga, Kawashima, & Mochiki, 2017). An exploratory factor analysis was carried out using data from 427 university students, and two factors were extracted: “Usefulness” (11 items) and “Empirical science” (6 items). Further analysis of the image development process revealed that expectations for the usefulness of psychology increased from junior high school students to high school students, but declined significantly through academic experience at universities. The understanding of the empirical features of psychology, on the other hand, gradually progressed from junior high school students to university students. These results suggest that it is important to understand the relationship between the content of high school studies and the actual state of psychology before studying psychology at university. Such an understanding may help prevent disappointment in learning of psychology in university.

Keywords : image for psychology, usefulness of psychology, empirical science, education of psychology